

生薬学1 実習

実施日：2012年7月14日（土）

場所：高槻市 大阪薬科大学

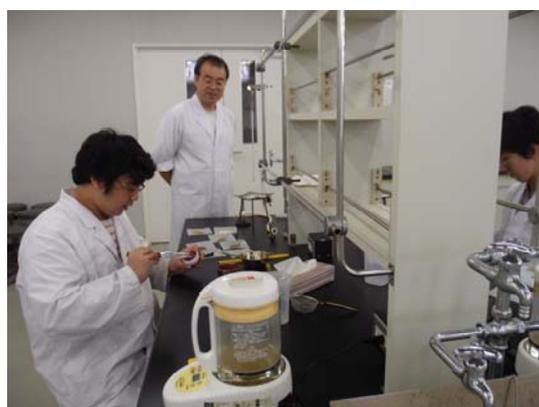
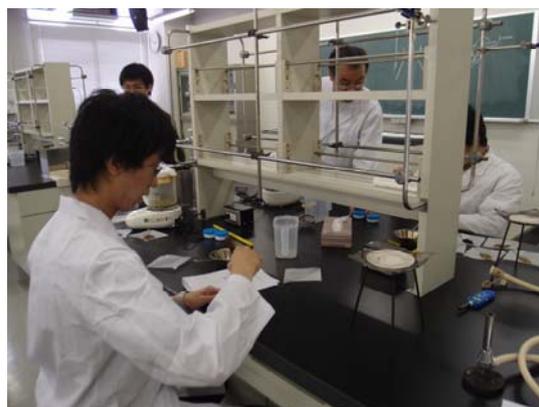
担当者：芝野真喜雄 准教授

対象：関西大学化学生命工学部 3回生「生薬学1」履修者の中の実習希望者

大阪薬科大学の薬用植物園はキャンパスのグラウンドの奥に位置していました。電子式の蚊取り線香を装備して芝野真喜雄 准教授の案内で夏の薬用植物園を見学しました。「生薬学1」の講義でも取り上げられた様々な生薬や漢方薬の原料となる生きた薬用植物の説明を受けながら観察し、ときには強烈な生の味や香りも体験しました。花を咲かしている薬用植物がとても多く、薬草らしい独特の香りに包まれていました。芝野コレクションといわれる授業中に何度も紹介されていた世界中から集められた様々な種類の甘草も観察できました。



学生食堂での昼食後に学生実習場で漢方薬の作製を体験しました。はじめは乳がんの麻酔外科手術で有名な華岡青洲が考案したという塗り薬である紫雲膏です。胡麻油の中で豚脂や蜜ロウをガスバーナーで加熱して溶解し、温度調整を続けながら生薬を浸しました。この待ち時間に標本室の見学も行いました。メルク標本という、日本では東大、京大、大阪薬科大学にしか状態のよいものは現存していないという薬品棚のコレクションがありました。薬用人参の大きな瓶がとても印象に残りました。紫雲膏の作製は、別の生薬からも有効成分を抽出し、ガーゼでろ過しました。紫雲膏が固まった後に容器にヘラで空気が入らないように詰めました。軟膏詰めは薬局でも行われることがあるそうです。



後半は代表的な漢方薬である葛根湯と小青竜湯に担当を別れてそれぞれ調製しました。ガラスでできた電気ポットのような外見の煎じ器を使い、それぞれの構成生薬を煎じました。生薬が踊りながら茹でられるのが見えました。この他にも高価な生薬というセンブリを使ったセンブリ茶も芝野真喜雄 准教授が試飲用に出してくれました。苦味の中にも甘味のようなものがありました。一般に販売されている漢方薬は顆粒剤で水で流し込むように飲み込むため、あまり味わったことがありませんでしたが、生薬から煎じた葛根湯は甘みも強く、一方、小青竜湯は甘味だけでなく酸味などの複雑な味わいで美味しく感じました。午前から午後4:00までの長時間の実習でしたが貴重な体験をすることができました。準備を進め休日のなか担当して下さった芝野先生に感謝致します。

